九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『（北京）万国公報』 : 清末維新派が発行した最初の雑誌

若杉, 邦子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9666

出版情報：中国文学論集. 25, pp.141-149, 1996-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

資料紹介

《(北京)万国公報》

――清末維新派が発行した最初の雑誌――

若杉邦子

梁啓超が新聞・雑誌というメディアを巧みに利用して、清末民初の知識人に絶大なる影響を及ぼしたことはよく知られている。しかし、梁啓超のジャーナリズム活動の意義が広く認識されている反面、彼がメディアに関わるに至った契機については、これまで十分に議論されてきたとは言い難い。今、本稿が紹介しようとする《(北京)万国公報》にしても、彼のジャーナリズム活動の出発点となった極めて重要な雑誌でありながら、いくつかの理由によって知名度が極端に低い。

《(北京)万国公報》はその正式な名称を《万国公報》と言い、清末維新派が北京で発行した最初の雑誌である。本稿が表記の際にあえて〝北京〟とことわるのは、欧米人宣教師の出版機構である〝広学会〟が、《(北京)万国公報》に先駆けて上海で発行した同名の機関誌《万国公報》(ここでは《(上海)万国公報》と表記する)と区別するためである。広学会の《(上海)万国公報》は、一八六八年(原名は《中国教会新報》、一八七五年にこの名に改められた)から一九〇七年にかけて、約四十年間にわたり発行された。《(上海)万国公報》はその最終目標をキリスト教の布教に置いていたが、まずは中国社会にスムーズに受け入れられるために、宗教色を前面には打ち出さず、知識の普及を表看板として掲げていた。そうした配慮が効を奏して、同報は清末民初の知識人達に大いに支持されたという。《(上海)万国公報》の方が《(北京)万国公報》より三十年近くも早く創刊され、かつ《(上海)万国

公報》が当時既に一通りでない知名度と影響力を誇っていたことから判断して、維新派が《（北京）万国公報》を創刊した際に、《（上海）万国公報》の存在を知りながら、あえて同じ名称を自分達の雑誌に冠したことは疑いがない。あるいは彼らは《（上海）万国公報》を知っていたのみならず、《（上海）万国公報》に影響されて、北京で《（北京）万国公報》を創刊したとさえ疑われるが、このことについてはまた後にふれたいと思う。

一九八〇年代の初頭まで、中国（大陸）の史学界はしばしば《（北京）万国公報》の存在自体を見落としたり、あるいは《（北京）万国公報》と《中外紀聞》とを同一視したりしてきた。一九五五年に出版された戈公振の『中国報学史』（北京　生活・読書・新知三聯書店）や一九八〇年に上梓された孟祥才の『梁啓超伝』（北京出版社）などがその代表的な例である。一九八四年になって湯志鈞がその労作『戊戌変法史』（人民出版社）の中で、「晩近史籍、或以強學會最早之報叫『中外紀聞』，或以『中外紀聞』即『万国公報』，實誤。」（同書一二九頁）と明確に否定して以来、ようやくそうした事実誤認は是正されてきたものの、《（北京）万国公報》の資料的価値に着目し、重点的に考察しようとする動きは今もって活発とは言えないようである。

《（北京）万国公報》の知名度が低かったことについては、次の三つの理由が考えられる。まず第一は該報の発行部数が元来少なく、しかも一部の士大夫にしか読まれなかったこと、第二は、同名で、しかも極めて有名な《（上海）万国公報》が、無名の《（北京）万国公報》の存在をすっかり覆ってしまったこと、第三は、維新派のリーダーである梁啓超や康有爲が、戊戌政変後、公の場でこの雑誌の名称をほとんど口にしなかったこと（梁啓超の『飲冰室専集』に収められた『戊戌政変記』附録『改革起原』は《（北京）万国公報》という雑誌名を明示する唯一の文章である。ただし、この『改革起原』は《清議報》に『戊戌政変記』が連載された当時、すなわち光緒二十四年十一月から同二十五年二月にかけての間は、同報上に発表されていない。『改革起原』の初出については別稿で改めて検討したい）である。これらの三つの事実があいまって、《（北京）万国公報》の存在を知る人が一時はほとんどいないという状況にまで至ったものと考えられる。

このように等閑視されてきた《（北京）万国公報》であるが、梁啓超の経歴を考える上では非常に重要な意味をもつ。なぜならば彼のジャーナリズム活動は、この機関誌が北京で創刊された一八九五年八月十七日（光緒二十一

年六月二十七日）に、その編集者兼主筆の役割を任された時点からスタートしたためである（その当時梁啓超は満二十二歳であった）。つまり《（北京）万国公報》の創刊は彼のジャーナリズム人生の始まりそのものなのである。

また、《（北京）万国公報》が、明代以来つづく京報しか存在しなかった首都北京において、最初に発行された民報であった点も注目に値する。さらには、《（北京）万国公報》を検討することによって、戊戌維新運動の〝原点〟に新しい観点から光があてられることも極めて意義に富むであろう。

以上の事柄をふまえれば、該報の資料的価値が梁啓超研究の分野のみならず、中国報学史、ひいては中国思想史の分野にまで幅広く及ぶものであることは明白である。そこで本稿はこの《（北京）万国公報》を取り上げてその概要を紹介しようとするものである。

その前にここで一つことわっておかなければならない。現存する《（北京）万国公報》は著しく少なく、今日その創刊号から最終号までを一揃い（全四十五冊）所蔵しているのは、全中国でもただ上海の〝中国基督教三自愛国運動委員会〟図書館（以下〝キリスト教図書館〟と略称）のみである。この図書館が《（北京）万国公報》を一般に公開しておらず、また、その影印本も今のところ出版されていないため、該報を全般的に調査することは容易ではない。筆者の場合も結局、その閲覧に対する正式な許可を得ることができなかった。

しかし、そうした不利な状況であるにもかかわらず、本紹介ではあえてこの《（北京）万国公報》を取り上げたい。その理由は、《万国公報》という雑誌名ならびにキリスト教図書館が明らかにしている該報に関する若干の情報（体裁や篇目等）、また周辺の諸資料（中国語、英語）に検討を加えることによって、多くの事実が判明し、その実態に迫ることが十分に可能だと思われるからである。ちなみに本稿では、書名を表すときには『』の記号を、新聞・雑誌名を表すときには《》の記号をそれぞれ用いることにする。

なおこの機会に、貴重な《（北京）万国公報》を所蔵するキリスト教図書館のことについて一言ふれておきたい。〝中国基督教三自愛国運動委員会〟の前身は、先述の広学会である。したがって、キリスト教図書館には今もなお、広学会の宣教師が外国人の視点から著した文献や、布教活動を行う外国人が当時の中国を知る手掛りとなりそうな資料（《北京万国公報》を含む）が豊富に所蔵されている。《（北京）万国公報》にしても広学会が、自分達の機関

《（北京）万国公報》（若杉）

誌と同名の雑誌が北京で発行されたことに注目して、その一セットを保管しておいたため、今日に伝えられることと相なったのである。

キリスト教図書館の職員より直接聞いた話によると、現存する《（北京）万国公報》の誌面には、出版元や出版年月日についての記録がなく、あるのはただ号数の記載のみであるという。このことから推すに、維新派は《（北京）万国公報》を発行するにあたり、何らかの理由によってその責任の所在を伏せていたようである。そのことは、後に維新派が保守派（頑固派）によって弾圧されたこととも、あるいは関係するかもしれない。

したがって、本来ならば創刊日や発行の間隔については知ることができないはずであった。しかし、現存する《（北京）万国公報》第一号のタイトル右横の余白部分に、広学会の幹事李提摩太（Richard. Timothy）の英文メモが残されていたため、それらの重要なデータが具体的に判明したのである（湯志鈞『戊戌変法史』一二九頁参照）。それによると《（北京）万国公報》は一八九五年八月十七日に北京で創刊され、発行は全部で四十五期に及んだ。この雑誌は隔日で発行されたというから、最終号（第四十五号）の発行は一八九五年十一月の中旬から下旬頃にかけてであったと推定できる。

該報の体裁についても図書館員に直接尋ねたところ、その版框は高さが約二十二センチ、幅が約十二センチで、中国紙を用いており、四葉八面から成る線装本であるという。片端を綴じているので、ここではこれを新聞ではなく雑誌と呼ぶことにする。

《（北京）万国公報》は第四十五号まで発行された時点で暫時停刊し、その後は《中外紀聞》という新たな名称のもとに十二月十六日より再スタートを切った。ただしこの《中外紀聞》は、第十八号が出された翌日（一八九六年一月二十日）に、保守派による強学会弾圧のあおりを受けて停刊に追い込まれたという。

《（北京）万国公報》が無料で配布されたのに対し、《中外紀聞》は購読料を徴収し、その体裁と中身の質も《（北京）万国公報》時代に比べると格段に向上したようである。なお、《万国公報》という名称が《中外紀聞》へと改められた理由については、先に示した李提摩太のメモが明らかにしており、それによると、広学会の機関誌と維新派の雑誌とが同一視されることを危惧した李提摩太が、維新派にその改名を要請したためであるという。

『康南海（有為）自編年譜』によれば、《（北京）万国公報》の撰述と編集を担当したのは梁啓超と麦孟華（字孺博、号蛻庵　一八七五―一九一五）の二人であった。この麦孟華という人物は、広東順徳の出身で光緒十九年の挙人であり、その著に『蛻庵詩詞』を残す。彼は《万国公報》や《時務報》に参与した他、一八九七年には梁啓超らと〝不纏足会〟を組織し、その董事に就任した。戊戌政変後は日本に亡命し、《清議報》を援助、一九〇二年に《新民叢報》が創刊された後はその撰述人としておおいに筆を揮い、一九〇七年には東京で君主立憲を宣揚する団体〝政聞社〟を組織するなど、終始一貫して維新派の重鎮であったと伝えられる。

そもそも『（北京）万国公報』の出版を発起したのは康有為を始めとする維新派の人士たちであった。「李聯（蓮）英爲宦寺，不識地圖，乃至徐用儀亦然，皆曰中國甚大，台湾乃一点地，去之何妨？太后習聞之，故軽割棄也。（『康南海自編年譜』光緒二十一年条項　中国史学会編『戊戌変法資料』第四巻）」とは、馬関条約締結（一八九五年四月十七日）直後に康有為が吐露した言葉であるが、ここからもわかる通り、彼らは中国積弱の最大の原因が清朝の士大夫の世界情勢に対する無知にあると考えていた。したがって、まずは現状の打破こそが急務であると判断し、第一次〝公車上書〟（一八九五年五月）から約三ヶ月後の八月には、早くも《（北京）万国公報》を創刊し、輿論の喚起に努めたものと考えられる。

維新派人士たちによる機関誌創刊を遡るそうした意図は、該報の篇目の上にも明らかに反映されている。

《萬國公報》篇目一覧

第一号　地球萬國説
第二号　地球萬國兵制
第三号　通商情形考
第四号　佃漁養民説
第五号　譯西報論鐵路（未完）
第六号　鐵路情形考（續譯西報論鐵路）
第七号　照錄美國林樂知原譯英鐵路公司清単
第八号　萬國鉱務考
第九号　照錄上海公報論西國郵政（未完）
第十号　照錄上海公報論西國郵政（續完）
　　照譯英郵局報単
第十一号　照譯美國郵局報単
　　照錄薛叔耘星使日記論鐵路二則（薛福成）
第十二号　萬國郵局章程價値考
第十三号　各國學校考
第十四号　鐵路通商説
第十五号　鑄銀説
第十六号　俄國新築西伯里亜鐵路説（錄林樂知原稿）（未完）
第十七号　俄國新築西伯里亜鐵路説（錄林樂知原稿）（續完）
第十八号　報館考略
第十九号　鐵路改漕説
　　鐵路備荒説
第二十号　印俄工藝興新富國説
第二十一号　學校説（未完）
第二十二号　學校説（續）
第二十三号　學校説（續完）
第二十四号　鐵路釋疑（未完）
第二十五号　鐵路釋疑（續完）
　　雑錄開辦鐵路工程数事爲問答以明之
第二十六号　鐵路便行旅説
　　鉄路興屯墾説
第二十七号　鐵路工程説略（未完）
第二十八号　鐵路工程説略（續）
第二十九号　鐵路工程説略（續）
第三十号　鐵路工程説略（續）
第三十一号　鐵路工程説略（續完）
第三十二号　王爵棠星使条陳八事錄呈衆覧（未完）（王之春）
第三十三号　王星使使俄草条陳（續）（王之春）
第三十四号　王星使条陳（續）（王之春）
第三十五号　王星使条陳（續完）（王之春）
第三十六号　農學略論（未完）
第三十七号　農事略論（續農學略論）
第三十八号　農器説略（續農事略論）
第三十九号　西國兵制考上：論選將
　　西國兵制考中：論練兵
第四十号　西國兵制考下：論営規
　　農學略論（續第三十八号農器説略）
第四十一号　照錄海關報冊論光緒二十一年各口貿易情形（未完）
第四十二号　照錄海關報冊論（續）
第四十三号　通商情形（續照錄海關報冊論完）
第四十四号　美國四百年大會記略（未完）
第四十五号　德國兵制考略（譯山東水師洋教習稿）（未完）

（『全国中国近代期刊篇目彙録』所収）

以上の篇目を見ることによって、《(北京) 万国公報》は、創刊号の「地球万国説」から最終号(第四十五号)の「徳国兵制考略」に至るまで、徹頭徹尾、世界事情の紹介に努めていたことが判明する。またそれと同時に、そのテーマの重点が富国、強国、養民、教民といった当面急務の問題に置かれていたことも明らかとなる。

ところで《(北京) 万国公報》は北京の新聞史上に新たな一ページを刻んだのであるが、該報を北京で発行した理由として、康有爲は『自編年譜』に「変法の本源は北京より始められねばならず」「王公大臣より始められねばならない」と判断したためだと述べている。康有爲の政治活動が公車上書に始まり、戊戌変法でそのピークを迎えたことは周知の事実であるが、そこからもわかる通り、彼の政治活動は常に直接的で急進的であった。こうした彼の政治活動の傾向に鑑みれば、《(北京) 万国公報》を敢えて北京で創刊した理由はおのずと理解されるであろう。

記録によれば《(北京) 万国公報》を創刊する際には印刷設備の問題も浮上したという。従来京報のみしか存在しなかった北京に最新の印刷機器などが備わっているはずはなく、一方、機器を購入するとなれば莫大な資金が必要となるため、維新派は仕方なく京報の発行所に委託して、その木製の活版でこの雑誌を印刷したという(梁啓超『梁任公在報界歓迎会之演説詞』一九一二年十月二十四日)。

またその発送方法は、《京報》の配送人に配達費用を支払って、京報を配るついでにその購読者(朝廷の士大夫たち)のもとへ届けてもらったらしい。ただし購読料は徴収しなかったという(康有爲『自編年譜』)(梁啓超同上資料)。

さて、該報の発行が維新派に対して重い経済的負担を強いるものであったことは想像に難くない。しかし彼らはその重圧に屈することなく、紙代、インク代、印刷費、発送費等の必要経費を会員による自己負担や(「紙墨銀二兩,自捐此款」康有爲同上資料)その他の寄付金によって賄ったという(「袁公(世凱)首捐金五百,加以各處募集,得千余金,遂在後孫公園設立會所,向上海購得譯書数十種,而以辦報事委諸鄙人」梁啓超同上資料)。

こうした苦心の甲斐あって《(北京) 万国公報》に対する反響は上々であったとみえ、康有爲は「朝士乃日聞所不聞,識議一変焉」、「報開兩月,輿論漸明」とその効果を自ら絶賛し、梁啓超もまた「辦理月余,居然每日發出三千張内外」と該報発行の経過を積極的に評価する。この雑誌の発行部数に注目すると、最初は一日一千部(康有

《(北京) 万国公報》(若杉)

爲『自編年譜』）のレベルからスタートして、一ヶ月あまりでその三倍にまで数字が躍進したと言うのであるから、康・梁の発言から誇張の語気を差し引いたとしても、やはり大変な成功ぶりであったと考えられる。

以上、李提摩太のメモやキリスト教図書館の公開する資料、及び康有爲・梁啓超の残した記録を参考にしながら《（北京）万国公報》の概要について紹介してきた。最後に少し視点を変えて、《（北京）万国公報》を発行した康・梁らが、該報に関して、事実とは相矛盾する発言を繰り返したことについて検討してみる。そしてその作業を通じて、この雑誌の実態と戊戌維新運動の原点に迫りたいと考える。

康有爲や梁啓超は《万国公報》をめぐって、しばしば故意に発言を避け、事実と符合しない意見を表明したとおぼしい。前者としては、例えば康有爲や梁啓超がその数多い記録の中で、『戊戌政変記附改革起原』におけるただ一度の言及以外は、全く《（北京）万国公報》の名を出すことのなかった事実が挙げられる。本稿はさきほど康・梁の記述を幾度にもわたって参照したが、実は《（北京）万国公報》に関する彼らの記述中に《万国公報》という名称は登場していない。康有爲は『自編年譜』の中で、雑誌名についてはふれずに、ただそれを〝報〟と呼んでおり、梁啓超は『在報界歓迎会之演説詞』において、《（北京）万国公報》のことを、《万国公報》と《中外紀聞》を併せた《中外公報》という架空の雑誌名でもって呼んでいる。

一方、後者の〝事実と符合しない〟発言の例としていち早く想起されるのは、《（上海）万国公報》が当時の中国人に与えた影響を彼らが否定したことであろう。梁啓超は「中国報館之沿革及其価値」（《清議報》第百冊、一九〇一年）の中で「其（《（上海）万国公報》）宗旨多倚于教，于政治學問界，非有大關係焉。」と述べるが、これは《（上海）万国公報》が知識を広めることを第一義としていたことや、そのため支持層が幅広かった事実と明らかに相反している。

では梁啓超はなぜ、このように事実と矛盾する発言をしたのであろうか。思うに、それは自分達（維新派）が《（上海）万国公報》から受けた強い影響によって、《（北京）万国公報》を創刊した事実を隠蔽するためだったのではあるまいか。そもそも《（北京）万国公報》の内容が《（上海）万国公報》にほぼ完全に依拠していたことは、李提摩太の著書『留華四十五年記』（英文）や、《（北京）万国公報》第一号上の英文メモにおいてすでに指

摘されている。今、その李提摩太発言の真偽を確かめるために《（北京）万国公報》の篇目を見てみるに、第九号と第十号の内容は《（上海）万国公報》の記事を引き写したものであることが明言されており、第七号、第十一号、第十六号、第十七号の内容もまた林楽知（《（上海）万国公報》責任者）の著した文章を収録したものであると明らかにされていることから、李提摩太の記録の信憑性が高いことを確信する。してみれば、《（北京）万国公報》とは《（上海）万国公報》の名称を模倣したのみならず、内容的にもそれを真似て作った雑誌であったと考えられ、梁啓超が《（上海）万国公報》の影響を否定したことは、明らかなる真実の偽りであったと結論付けられるのである。

康有爲や梁啓超が、《万国公報》という名称をめぐって、戊戌政変以後沈黙を守った理由は、その名が広学会の機関誌の名に等しかったことをおいて他には考えられない。それは宣教師やキリスト教に対する世間の目が厳しかった当時の状況に鑑みれば、即座に納得のいくことである。彼らは、自分たちの維新運動が、実は宣教師達の影響の下に、布教活動の一環としての報刊経営を完全に模倣する形で始められた事実を《（北京）万国公報》という雑誌名が暴露してしまうことを懼れていたのではなかったか。

いずれにしても《（北京）万国公報》は、戊戌維新運動の原点ともいうべき思想的母胎が、宣教師の活動そのものであった可能性を提示する存在である。そうした意味において《（北京）万国公報》は維新派と広学会の間を強固に結び付ける得難い中国側資料であり、その研究の価値には量り知れないものがある。今後はこの資料が示す事実に基づいて、従来顧られることの極めて稀であった、維新派における宣教師たちの理性と感情の両面にわたる強烈な影響を考慮しつつ、清末中国思想の全体的な流れについて再検討してみる必要がありそうだ。

研究者の一人として、この貴重な資料が世に広く影印公開されることを心から希望して止まない。

《（北京）万国公報》（若杉）